

九州医師会連合会第2回連絡協議会



理事 稲富 仁



今回、2月14日（土）福岡県において開催された九州医師会連合会第2回連絡協議会は、「地域と医療を支える医師会をいかに理解してもらうか」という極めて本質的なテーマのもと、各県の取組みと今後の方向性を共有する重要な機会となった。

会議では、①地域住民への発信、②医師・医学生への働きかけについて、各県が限られた時間の中で工夫を凝らした報告を行い、その後、活発な意見交換が展開された。

①地域住民への取組みにおいて、沖縄県の存在感は際立っていた。とりわけ、コンビニと連携した「おむすびプロジェクト」は大きな注目を集め、質疑が集中したことからも、その発信力と独創性の高さが際立っていた。田名会長による熱意あふれる説明は、医師会活動の新たな可能性を強く印象付けるものであり、今後、同様の取組みが九州各県へ波及していくことも十分に期待される。また、福岡県の医療モニター

制度「メディペチャ」は、住民参加型の新たなアプローチとして示唆に富むものであった。一方で、多くの県では依然としてマスコミや講演会中心の発信にとどまり、SNS活用の難しさという共通課題も浮き彫りとなった。

②医師・医学生への取組みにおいても、各県は入会促進に向けた創意工夫を重ねていた。

沖縄県からは、琉球大学医学部生への講義や白衣贈呈、さらに若手医師による「Team F-Vision」など、将来を見据えた多角的な取組みを報告した。これらは単なる入会促進にとどまらず、「医師会の価値」を次世代へどう継承するかという本質的課題への挑戦であるといえる。

今回の協議を通じて、沖縄県の取組みは他県から高い関心と評価を集めた。地域と医療をつなぐ医師会の役割が一層問われる今、先進的な取組みをさらに発展させ、全国へ発信していく責務を改めて強く認識した。